

特集

病院管理会計と BSC の効用

病院の経営環境が厳しくなる一方、患者・家族からは安心・安全な医療を強く求められており、それに対応できる合理的な経営管理手法が求められて久しい。管理会計は、貸借対照表や損益計算書などのよく使われる財務会計とは別に、組織管理や意思決定のために利用される会計であるとされる。医療分野においては、かねてから原価計算や指標の設定による比較検討などが行われてきたが、その発想は概ねそれに相当すると言える。近年、DPC の導入とその拡大などの流れの中で、改めて病院管理会計のあり方とその活用が大いに注目されるようになった。また、目標管理手法の側面を持つ BSC も、その効用が認識されつつある。本号では、この病院管理会計と BSC の有効性と成果について取り上げる。

まず、医療における管理会計と期待される役割について、総説的な解説を受けたうえで、わが国における診療科単位の部門別収支を、標準的な原価計算方式を用いて病院間比較を行った調査の概要を紹介していただく。これは診療科別管理会計と言うべきもので、その算定方式と調査結果は今後の病院経営に有効であろう。一方、採用する病院が増加しつつある BSC について、その基本的な方法と手順の紹介を受けた後、この管理手法を利用している諸外国の現況とともに、これまでのわが国の病院における全体的な取り組み状況と、今後の課題について総括していただく。また、精力的に BSC を導入して成果を得ている病院の経験から、病院組織がどのように変わったか、財務の視点から、その有効性や問題点について報告してもらうこととしている。

病院管理会計への関心が高まった背景には、DPC による定額支払い方式の導入と、その適用病院が急速に増加したことが指摘される。収入が一定範囲に抑えられる中で、部門別に、あるいは診断群分類別に原価を計算し、適切な管理をすることが合理的な対応であると考えられるからである。そこで、改めて「今後の病院経営における原価管理をどうするか」、組織的に、また戦略的に取り組んでいる病院にお集まりいただいて座談会をすることとした。先行する特定機能病院では、国立大学法人の運用する病院管理会計システムがあり、社会保険病院でも DPC 適用病院を中心に部門別原価計算の定点観測によるベンチマーク分析の取り組みがある。電子カルテを核として管理会計に早くから取り組んだ民間病院もあり、公認会計士の立場からの解説も今後の病院経営に役立つであろう。

BSC の導入事例も少なくないが、診療科単位での BSC 導入事例や、職員満足度の観点からの BSC の取り組みを紹介する。また、カナダは BSC に熱心な国で、オンタリオ州では全病院共通の BSC を作成し、州全体の医療を BSC で管理している。これらの事例が今後の病院の合理的な運営に役立てられることを期待したい。

大道 久

日本大学医学部医療管理学教授